

開催地名：滋賀県彦根市	
開催日時	令和3年9月21日（火） 13:30～14:30
開催場所	彦根市立南中学校
語り部	糸日谷美奈子（千葉県千葉市）
参加者	彦根市立南中学校 約750名
開催経緯	本市では、南海トラフ巨大地震による被害が想定されている他、巨大地震が引き起こされると想定される活断層が県内に多く通っていることから、地震への備えは重要かつ喫緊の課題である。また、阪神淡路大震災から四半世紀、東日本大震災から10年が経過し、具体的な被害をリアルタイムに知らない子どもたちにとって、震災を経験された方からの生の声を聴き、被害状況やそこからの教訓を体験的に知ることが大変意義あることである。そのような機会が持っていないことが課題である。
内容	<p>(1) 震災以前の防災教育について</p> <p>東日本大震災が発生した平成23年3月11日当時、私は岩手県釜石市の釜石東中学校で理科教諭として勤務していた。釜石市は岩手県沿岸南部にある町で、釜石東中学校は釜石市の北部に住む中学生が通学している。釜石東中学校では避難訓練を実施していたが、各クラスが並んで非難する形式で行っていた。しかし東日本大震災の発生時は、放課後だったため、ホームルームを行っているクラスもあれば、教室で卒業式に向けて寄せ書きをしている生徒も、部活の準備をしている生徒もいた。そのため訓練時とは異なり、各々が個々で避難を行った。</p> <p>校舎から約800メートル離れたデイサービスセンターの駐車場が避難場所として指定されていたため、平時から合同で避難訓練を実施している近隣の小学校と釜石東中学校で避難を行った。また、釜石市は1896年の三陸地震で大きな被害を受けていたため、防災教育に力を入れており、避難訓練以外にも、総合学習の時間を使い防災学習を行っていた。三十年以内に震度6弱以上の自身が起こる可能性が75パーセント高く予測されていたこともあり、地震や津波への意識は高かったとも感じている。これらの取組があったため、大地震と津波から身を守ることができた。</p> <p>(2) 東日本大震災当日の情景</p> <p>揺れが起きたとき、私はホームルームを終えて職員室にいた。職員室にいる教師の携帯電話から緊急地震速報のアラームが一斉に鳴り、その後地鳴りが聞こえた。駐車場に出ると、ワゴン車が飛び跳ね、渡り廊下が揺れているのが見えた。立っていられる状況ではなかったため、近くにいた生徒</p>

	<p>と腕を組みながらうずくまってやりすごした。避難所に指定されているデイサービスセンターへ到着してからも余震も続いていたため、危険を感じ、さらに高いところにある避難所へと移動した。最終避難場所に到着して海の方角を見ると、砂煙があがって近づいてくるのが見えた。逃げろという大きな声に従い、振り返らず走り出した。舗装されていない山道を進み、上まで登ると、眼下では自分たちが住んでいる町が波にのまれていくのが見えた。その後、雪が降っているなか、市役所近くの避難場所まで歩いた。廃校になった中学校の体育館に集まり寒さに耐えながら夜を越した。電気もなく、周囲は闇に包まれていた。体育館には約 2000 人が避難していた。寝る場所もなく、仮設トイレも一台しかなかった。飲み水すら危うい状況が続いたが、自衛隊の到着後は、電気が通ったり炊き出しが始まったり、環境が改善した。</p> <p>(3) 東日本大震災から得た教訓</p> <p>釜石市では死亡者 888 名、行方不明者 154 名という非常に大きな被害がでた。しかし、学校管理下にあった児童、生徒は全員無事だったから「釜石の奇跡」と称されることとなった。全国の小中学校と比べて、釜石東中学校では様々な防災教育があった。このことが被害の軽減に大きく貢献したと考えられる。</p> <p>内陸に住んでいる方も、海へ遊びに行く機会や、将来沿岸部への移住をする可能性がある。私自身が内陸で生まれ育ち、釜石市に移住してから防災に関する教育に触れた。そのため、沿岸部にある学校だけでなく、内陸の学校でも津波を含む防災教育を行う必要を強く感じている。</p> <div data-bbox="512 1431 911 1682" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="938 1431 1377 1682" data-label="Image"> </div>
開催地より	<p>今回の講演を通して、防災教育の重要性を強く感じた。避難訓練を行うだけでなく、常にそれだけでは十分ではないという視点を持って防災について考え続けたい。</p> <p>貴重な経験を伝えるだけでなく、自身も防災士の資格を取得し、活動を続けている語り部に改めて敬意と感謝を示したい。</p>